

研究助成実施報告書

助成実施年度	2022 年度
研究課題（タイトル）	大都市における遺跡の創造的な活用に関する研究：首都圏の事例
研究者名※	Drianda Riela Provi
所属組織※	早稲田大学 社会科学部 準教授
研究種別	研究助成
研究分野	都市建築史、都市と文化
助成金額	109 万円
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

（ ）は、報告書提出時所属先。

大林財団 2022 年度研究助成実施報告書

所属機関名 早稲田大学社会科学部
 申請者氏名 リーラプロビドリアンダ

研究課題	大都市における遺跡の創造的な活用に関する研究：首都圏の事例
(概要) ※最大 10 行まで 本研究の目的は、大都市圏が遺跡、特に先史時代の遺跡をどのように保存し、都市住民の日常生活に利用できるようにするのかを明らかにすることである。首都圏をケーススタディとして、文献調査、現地観察、専門家へのインタビューを組み合わせ、先史遺跡が人々の日常空間となりうることを明らかにした。その結果、都市住民が先史遺跡を日常的に利用する要因として、以下の 3 点が挙げられた。それは、(i) アクセスしやすさ、(ii) 場所の手頃さ、(iii) 公共考古学の試みである。さらに、調査結果からは、遺跡への定期的な訪問者を増やすために、先史遺跡がとったいくつかの創造的なアプローチも発見された。本研究は、都市住民が日常空間として利用する可能性の高い先史時代の遺跡の特徴をより深く理解するために、より多くの遺跡を調査する必要性を示唆している。	

1. 研究の目的	(注) 必要なページ数をご使用ください。
地域社会や都市にとって遺跡は重要であるにもかかわらず、特に発展途上国では近代化の必要性から、遺跡を保存することは常に困難であった。急速に都市化・近代化する地域のもとで、遺跡をよりよく保存するためには、遺跡を現代の生活に適したものにすることが重要である。そこで本研究の目的は、大都市圏が遺跡、特に先史時代の遺跡をどのように保存し、都市住民の日常生活に利用できるようにするのかを明らかにすることである。そのために、本研究では大都市圏のケースに焦点を当てる。その理由は、首都圏がアジアにおけるメガシティの一例であり、多くの遺跡を有し、住民が日常的に利用しているからである。本研究の結果は、他の歴史都市、特に発展途上国において、残された遺跡が都市住民に日常的に利用されるよう、より創造的な解決策を見だし、付加価値を生み出すことに役立つ可能性がある。	

2. 研究の経過	(注) 必要なページ数をご使用ください。
本研究は、大都市における遺跡保存の現代的課題に関する文献調査から始まった。この文献調査では、遺跡が現代の生活との関連性を保つための課題と機会をよりよく理解するために、先進国と発展途上国の両方の事例研究を取り上げた。この文献調査から得られた主要な結果は、大都市の遺跡が直面する共通の問題を特定し、PI が調査を設計し、事例調査地域を選択する際の考慮事項となった。次のステップとして、PI は大東京圏における先史時代の遺跡の存在を地図上で確認した。その結果、	

首都圏とその周辺には驚くほど多くの先史遺跡が存在することがわかった。PI は調査設計の当初、外国人観光客に人気のある観光地としてまだ考えられていない遺跡に焦点を当てることにした。むしろ、地元住民を含む国内観光客に人気のある遺跡が望ましい。グーグル検索エンジンを使用し、検索エンジンに英語ではなく日本語を使用することで検索対象を絞り込んだ。

その後、PI はデータ収集を 2 つのフェーズに分けた。まず、予備調査である。PI と調査支援者が 15 カ所の先史時代の遺跡を訪れ、さらに分析すべき特徴を特定する。予備調査のために選ばれた遺跡は、Google 検索エンジンが推奨するトップリストに基づいて選ばれた。グーグル検索の結果は、検索エンジンで入力されたキーワードに関連すると思われる場所を示す、広範なクロールとインデクシングのプロセスから根ざしている。したがって、この結果は、首都圏でよく検索される先史時代の遺跡を表していると言える。

第一段階で得られた知見は、PI がさらなる観察ガイドラインを作成するために考慮し、そこから学ぶべき最も際立った特徴を持つと考えられる遺跡を検討した。さらに、時間的な制約を考慮し、縄文時代の先史遺跡に絞って調査を行った。また、東京都考古埋蔵文化財センターへのヒアリングを行い、先史時代の遺跡を現代に伝えるための課題や戦略について聞き取りを行った。研究の進展と成果は、インドネシアのバンドン工科大学およびパジャジャラン大学での一連の講義で発表された。

3. 研究の成果

(注) 必要なページ数をご使用ください。

文献調査の結果、都市環境への遺跡の取り込みと、それが都市生活に及ぼす影響について具体的に取上げた最近の研究は不足していることがわかった。先行研究の多くは、都市化された地域から離れた場所にある遺跡を調査したものである (Alazaizeh, 2014; Alazaizeh et al., 2020; Găzdac & Humer, 2020; Jusoh et al., 2020)。また、遺跡や遺跡公園として指定された場所での観光産業の発展や振興に取り組むことを中心に据えた研究もある (Afrić Rakitovac et al., 2019; Karachalis, 2015; Kranioti et al., 2022; R Ikhran et al., 2021)。このように、本研究は、都市化された地域に位置する先史時代の遺跡を、それらがどのように地域コミュニティの不可欠な一部として機能し、地元の人々の日常的な空間として利用されうるかを理解するという文脈で研究することを意図した最前線の研究のひとつである。

研究の第一段階では、大東京圏（人口密集地を含む）に先史時代の遺跡が存在することが確認された。遺跡は元の特徴を忠実に残すために、そのまま保存されている。指定された遺跡公園内に保存されているものもあれば、住宅地や商業地域の真ん中に保存されているものもある。興味深いことに、これらの先史時代の遺跡のほとんどすべてが、海外からの旅行者の間では有名ではない。大東京圏のヘリテージ・ツーリズムの目的地としてリストアップされる可能性は低い。試験的な調査対象として 15 カ所が選ばれた（表 1 参照）。これらの遺跡は、グーグル検索エンジンと地図で、大東京圏の縄文遺跡、弥生遺跡、古墳遺跡のキーワードで検索し、表示されたものを選んだ。

表 1. プレ調査地

No.	遺跡名	所在地
1	下野谷町遺跡	西東京
2	縄文の村	多摩
3	大森貝塚	品川
4	下高井戸塚山遺跡	杉並
5	大塚・歳勝土遺跡	横浜
6	多摩川台公園 古墳群	大田
7	代々木八幡遺跡	渋谷
8	加曽利貝塚	千葉
9	野毛大塚古墳	世田谷
10	三殿台考古	横浜
11	船田石器時代遺跡	八王子
12	加賀原遺跡	横浜
13	東山貝塚	目黒
14	水子貝塚	埼玉
15	池淵遺跡	練馬

パイロット調査では、代々木八幡遺跡にある 1 つの先史遺跡は、復元された住居が柵で囲まれているため、一般参観者が公に立ち入ることができないことが確認された。見学者は柵の外からしか家を見ることができず、遺跡自体の歴史や重要性についての情報は非常に限られていた。

しかし、縄文の村や大塚・歳勝土遺跡のような他の遺跡では、復元された家屋に無料で入り、内部を見学することができる。この可能性は、三殿台考古のような小規模な遺跡で、復元住居の内部を見学することができる遺跡でも発見された。とはいえ、すべての遺跡に定期的に見学者が訪れるわけではないことがわかった。交通の便が悪く、見学の機会が限られている遺跡は、見学者が訪れる可能性が低い。

これらを確認するため、PI は先史時代の遺跡が人々の日常空間として利用されている要因を調べるために、以下の指標を作成した（表 2 参照）。

表 2. 調査の指標

No.	指標	ノート
1	アクセシビリティ	公共交通機関からの距離（駅からの歩きやすさ、バスネットワークとの接続性）
2	場のアフォーダンス	先史時代の遺跡がどの程度異なる空間の利用を可能にしているか、特に考古学的訪問以外の活動。
3	公共考古学の取り組み	スペースを利用する来場者を誘致するためのイベント企画とキャンペーン。

15ヶ所のパイロット調査地点の中から、PIは最も特徴的な6ヶ所を選び、第2段階の調査を実施した（表3参照）。時間的制約を考慮し、今回は縄文先史時代の遺跡のみを対象とし、弥生や古墳をテーマとした遺跡公園よりも、縄文をテーマとした遺跡公園の方が都内や近県に多いことを考慮した。また、遺跡の周囲には住宅地や商業地が広がっていることが多く、より興味深い分析が可能である。

表3. 対象地

No.	遺跡名	所在地	ステータス
1	下野谷町遺跡	西東京	国定史跡
2	縄文の村	多摩	市の文化財第57号
3	大森貝塚	品川	国定史跡
4	大塚・歳勝土遺跡	横浜	国定史跡
5	加曽利貝塚	千葉	国定史跡
6	水子貝塚	埼玉	国定史跡

その結果、すべての遺跡が最寄り駅から徒歩圏内にあることが確認されたが、加曽利貝塚と水子貝塚の2遺跡は、中心市街地からかなり離れた場所にあると考えられる。加曽利貝塚と水子貝塚の2カ所は、中心市街地からかなり離れている。一方、他の4つの遺跡は、人口密度が高く、遺跡を通過する人の交通量が多い、既成の複合用途地域に組み込まれている。縄文の村と大塚・歳勝土遺跡の2カ所は、大型複合ショッピングセンターなどの商業地域に近接している。

第二の指標からは、大森貝塚、大塚・歳勝土遺跡、水子貝塚の3つの遺跡は、比較的高い場所的余裕を提供していることが明らかになった。考古学的な訪問を目的とするだけでなく、訪問者は様々な活動を行うことができる。ピクニック、ジョギング、外遊びなど、日常的なアクティビティが可能であることが、これらの場所が国内観光客に人気である理由と考えられる。例えば、大塚・歳勝土遺跡では、ピクニックから地域の集いまで、さまざまなイベントにオープンスペースを利用することができる。水子貝塚では、復元された縄文住居の近くで遊ぶこともでき、空間を利用する際に住居を壊さないという地元管理者の信頼がうかがえる。一方、下野谷遺跡、縄文の村、加曽利貝塚の3遺跡は、アフーダンスが中程度である。遺跡観察以外のアクティビティは可能だが、ピクニックや外遊びができるスペースは比較的限られている。下野谷遺跡の場合、すでに博物館のような設計とレイアウトになっており、来館者が考古学的な学習や観光をする場になっている。一方、縄文の村や加曽利貝塚の場合は、植栽の配置が多く、オープンスペースが限られているため、積極的な外遊びの機会を減少させている可能性がある。



イメージ1．縄文の村にある竪穴住居

3 つ目の指標については、5 つの施設はその場所のイベント、特に考古学的なイベントに関連したイベントの宣伝に非常に積極的であることが確認された。特に、夏休みや春休みなど、子どもたちの学校が休みになる時期に、毎年イベントを開催している。また、古代の生活様式や文明に関心のある高齢者や遺産愛好家など、一般の人々にも開放している。このようなイベントやキャンペーンは、先史時代の遺跡で楽しめるアクティビティについて観光客に知らせるものであり、必要不可欠なものと考えられる。これらのイベントは、施設や博物館への定期的な訪問だけでなく、さまざまなイベントへの参加を目的とする訪問者の定期的な訪問を刺激することができる。また、展示室や実験室、屋外スペースなど、こうしたイベントを可能にする特定のスペースの貢献も確認された。縄文の村や加曽利貝塚のように、こうした体験型のイベントを提供している施設もある。しかし、考古学の公開イベントやそれをサポートする空間だけが集客のアプローチではないことに注意したい。例えば、大森貝塚には原生博物館がある。大森貝塚では、イベントを開催するのではなく、**AR**（拡張現実）アプリを開発し、来場者にさまざまな体験を提供している。地域遺産をより多くの人に知ってもらうためにテクノロジーを活用することは、実に興味深い。別のサイト、例えば加曽利貝塚も、訪問者の体験を最適化するために現場のテクノロジーを取り入れようとしている。しかし、その利用はまだわずかであり、ほとんどの訪問者は遺跡を訪れる際にそのような機能を使おうとはしなかった。

以上の 3 つの指標を考慮すると、調査は次のことを強調した、

- (i)より定期的な訪問を可能にするために、公共交通機関への良好なアクセスを提供することの重要性。
- (ii)先史時代の遺跡を現代の生活により適したものにするために、考古学的な訪問の利用以外の場地的アフォーダンスの貢献。
- (iii)先史時代の遺跡を定期的に訪れる観光客を増やすための一つの方法として、公共考古学的試みの貢献。

4. 今後の課題

(注) 必要なページ数をご使用ください。

時間の制約もあり、調査した縄文先史遺跡の数は限られていると考えられる。したがって、今回の調査では考慮されなかった異なる特徴があるかもしれない。今後の研究では、縄文時代の遺跡の範囲をさらに拡大し、弥生時代や古墳時代の遺跡も含めることが提案される。現在のところ、利用可能なデータからは、遺跡が完全に市街化された地域、半市街化された地域、非市街化された地域のいずれに位置するかについての詳細な情報は得られていない。

したがって、今後の研究では、各遺跡の現状と課題をマッピングし、現代の都市生活に関連する包括的なデータベースを作成することに重点を置くべきである。そうすることで、開発の圧力下にある巨大都市における都市遺跡の現状を十分に理解し、都市における遺跡の存在を守り続けるためにどのような戦略を立てるべきかを考えることができるようになる。